

(別紙)

<外国人技能実習生サポート事業第1弾>

― 日常生活サポート交流会（七輪でバーベキュー） 報告書 ―

- 1 開催日時 令和1年8月25日（日）午前9時30分～午後3時
- 2 開催場所 福江高等学校
- 3 内 容 9:30 福江高校集合
9:40 日本語学習（福江高校の生徒さんと七輪でバーベキューしながら日本語を学びます。）
13:00 田原市紹介（福江高校伊藤先生）
13:30 交通ルール（田原警察署）
14:00 防災教室（田原市防災課）
- 3 募集定員 25名
- 4 主 催 NPO 法人ウイズ
- 5 協 力 福江高等学校
- 6 後 援 田原市、田原市教育委員会、たはら国際交流協会、JA 愛知みなみ、渥美商工会

1、目的

NPO 法人ウイズでは、外国人技能実習生を対象とした「外国人技能実習生サポート事業」を実施しております。その一つとして、実習生の皆さんに日常生活の知識を身に付けていただくと同時に日本語の能力アップに役立てていただくことを目的に、福江高校の生徒さんとの交流会を開催いたしました。

2、内容

①福江高校集合

時間前に全員集合 25名参加（中国3名・ベトナム8名・インドネシア14名）。事前に9グループ分けをし、それぞれに名札を配布。受付は福江高校生徒による。

②日本語学習（七輪でバーベキュー）

NPO 法人ウイズ榎原専務理事の取り回しで開催

- ・福江高校伊藤先生のあいさつに次いで、伊藤先生より七輪の火のおこし方の説明の後、実演を見せた。技能実習生のほとんどが初めての経験であり、興味津々実演を見入っていた。
- その後、カボチャ、ピーマン、玉ねぎ、鳥のもも肉等を実習生に調理させ、トレイに分けて机に並べ、七輪の火が起きたところで、高校生を交えてそれぞれのグループにてバーベキューを始めた。

③田原市紹介

研修室へ移動をし、福江高校の伊藤先生が用意した田原市の見どころのパネルにて説明を受けた。その後、今回の交流会に関するアンケートを実習生の皆さんに書いていただいた。日本語がわかるかどうか心配をしましたが、お互いに話し合いながらアンケートに答えた。

④交通ルール（田原警察署）

田原警察署のご協力により、パトカー2台、白バイ、着ぐるみ、警察官の制服等を用意していただき、実習生はパトカーに乗ったり、白バイに乗ったり、また、制服を着て写真を撮ったりして、警察の和やかな対応を楽しんだ。

⑤防災教室（田原市防災対策課）

田原市防災課が用意したプロジェクターにて防災に関する説明を受け、実習生の皆さんは改めて防災に対する意識を学んだ。

参考写真







東三河版



春リンドウ
富樫章紀
新美術協会
ニュース、情報は下記へ
社会部
052-231-1650・5919
Eメール
shakai@chunichi.co.jp
豊橋局 千440-0806
豊橋市八町通4-52-1
0532-52-7181 Fax54-4655
岡崎支局
0564-22-1661 Fax25-1554
豊田支局
0565-24-1010 Fax25-1118
豊川通信局
0533-86-2305 Fax82-1575
新城通信局
0536-22-0242 Fax23-3811
蒲郡通信局
0533-68-2437 Fax66-1465
設楽通信部
0536-62-0269 Fax62-1577
田原通信部
0531-22-0269 Fax23-2889
中日新聞へのご意見は
読者センターへ
052-221-0800 Fax221-0819
Eメール
center@chunichi.co.jp
広告のお申し込みは
広告局三河アドセンターへ
岡崎 0564-23-3051(代)
掲載写真を購入希望の方は
最寄りの中日新聞販売店へ

技能実習母国につなげ

全国屈指の農業生産額を誇る田原市のNPO法人「ウィス」(ウィス)は、外国人技能実習生が安心して市内で暮らし、帰国した後も農業を続けられるよう支援する事業を三万年計画で始めた。地元高校生との交流会や、インドネシアのバトゥ市の公益財団法人と連携したトレーニング農場の開設、農業経営の講座などを計画している。

(鈴木弘人)



左から田原市福祉課職員、実習生、バトゥ市の福祉課職員

田原のNPO法人 交流会や帰国後の支援も

「おいしいね」。インドネシア、ベトナム、中国の実習生と高校生が七輪を囲んで交流を深めた。二十五日、田原市の福祉高校で第一弾の企画としてパーベキョウを開催。実習生二十五人と福祉高校生十人が参加した。昨年七月に来日し、トマト農家で実習するインドネシア人のハズミナ・メラ・セプティさん(20)は「地元の人と話す機会が少ないので楽しかった」と話した。

市内で実習する外国人は千八百一十一人(三月末現在)。増加傾向にあり、半分以上は農業に従事している。制度の改定で実習期間が最大三年間から五年間となり、さらなる実習生の増加が見込まれている。

ウィスの榑原宣克専務理事(56)は「多くはお金をためる目的で来ており、帰国してからも農業を続ける実習生はごくわずか。優れた技術を持つ農家が多い田原での経験を生かしてもらいたい」と話す。

バトゥ市のトレーニング農場は来年度までに完成予定で、インドネシアに合う作物を模索している。農場ができた際、帰国した実習生の受け入れを始めるといふ。来年二月には「マーケティングや資金繰りなどを学ぶ」「当農企業教室」を田原市で開催する。

2 (0531)0531(36)688